

黒雲くろくもに飛とびのつて戦たたかいにいつた女おんなの子こ

わたしはにいきさんと二人、静かな村に住んでいました。  
ある日のこと、にいきさんが狩りに出かけると、  
なぜか、吸いこまれるように眠くなってしまうたのです。  
少しだけ、と思つて横になると、そのまま寝入つてしまいました。

すると、夢を見ました。

オタスツの村に住むオタスツウングルがおそわれて、戦いになっています。  
「早く行つて、助けてあげなさい」と、夢のなかでだれかにいわれました。

はつとして目を覚まし、家の外に出てみると、  
白くて大きなツルが一羽、オタスツの村の方へと飛んでいくではありませんか。  
やはり、夢は、ほんとうだったのです。

にいきさんの帰りを待っているわけにはいきません。  
わたしは家に入ると、さつそく戦いのしたくをしました。

女物の戦いの服、ロルンペ・イミを着て、  
女物の戦いの兜、ロルンペ・カサをかぶり、  
女物の戦いの刀、ロルンペ・コロ・エムシを差して、飛びだしました。

外へ出ると、いきなり体がポーンと空高く跳ねあがりました。

わたしは、目の前のまっ黒な雲のかたまりに、飛びのりました。

黒雲はぐいぐいと、空をかけていきます。

風が、耳元でヒューヒューと鳴ります。

先をゆく黒雲のなかで、稲光がピカピカッと光ります。

それは、つぎつぎに稲妻を落としながら、進んでいきます。

稲妻が落ちるたびに、大地はま昼のように光り、野山がくつきり見えました。

オタスツの村は、もうすぐです！

村が見えてきて、おどろきました。

たくさんの人が、まるで川原の葦のようにひしめいて戦っています。

いったいどこから、どんな人々が、攻めてきたのでしょうか。

黒雲は、すうつと村に降りていきました。

わたしは、ひらりと雲から舞いおりると

「こらあ！ オタスツウングルになんてことをするんだっ！」

と叫びながら、刀を振りおろしました。

バツサバツサと草を刈るように、敵をたிரらげていきます。



空はまっ黒。稲光がするたびに、わたしのすぐ前で  
見知らぬカムイが戦っているのが見えました。  
刀が、まるで日の光のように鋭く光ります。  
わたしを守り、助けてくれています。  
やがて、にいさんもかけつけてくれました。  
とうとう敵は、潮が引くように逃げていきました。

戦いが終わると、男たちは集まって話を始めました。  
わたしは、仲間に入りたくなかったので、  
一人ぼつんとはなれて、考えごとをしていました。  
わたしを助けてくれたあのカムイは、いつたいたれたのでしょう？

話も終わったようなので、行ってみると、オタスツウングルが  
「もう心配ないから、二、三日、泊まっていきなさい」  
と喋ってくれました。

そこで、わたしは、しばらく村に泊めてもらうことにしました。

その夜のことで、夢のなかに、カムイが現れました。

カムイはわたしに、告げました。

「オタスツの人々は、ひとかけらも悪い心のない、よい人々だ。

カムイを祀り、いつも祈りも欠かさない。

オタスツウンクルを悪くいう人は、人間の世界にも、カムイの世界にも、一人もいない。そんなよき男のところに、悪い心を持つ人々が攻めてきたので、

わたしたちも戦って、助けてやったんだよ。

だから、酒を造ったら、どうか祈りの最後でいいから、わたしたちを拜んでほしい。

そうすれば、オタスツウンクルの名声は、ますますあがるだろう」

それは、雷のカムイでした！ 雷のカムイが、わたしを助けてくれたのです！

目が覚めると、村の人々も、口をそろえて「雷のカムイの夢を見た」といいました。

みんな、おなじ夢を見たのです。

「ありがたい、ありがたい。カムイのおかげで、わが一族は生きのびることができた」

オタスツウンクルは、祈りの儀式であるカムイノミを盛大に催しました。

方々から人を集め、ふだんから拜んでいるすべてのカムイを拜んだのです。

あらたに雷のカムイを、ていねいに拜んだのは、いうまでもありません。